北九州市市長 北 橋 健 治 殿

一般社団法人 日本建築学会 会 長 吉 野 博

# 「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

# 保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。 さて、今般、北九州市八幡区の「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の2つの建物の取り壊しおよびその活用法が、隣接する病院の建て替え計画も考慮されながら、市議会で検討され進められようとしていると新聞やテレビ等を通じて聞き及んでおります。一方、地元の方々からは保存を望む声が上げられていることも新聞等のマスメディアを通じて広く知られることとなっています。

ご承知のように当該2つの建物は戦後日本の近代建築界を代表する建築家村野藤吾の設計によるものであり、しかも彼が青少年期に過ごした地元八幡に残した作品であります。「北九州市立八幡図書館」は1955(昭和30)年に竣工・開館し、「北九州市立八幡市民会館」はその3年後の1958(昭和33)年に開館に致しました。その建築作品としての価値が評価されて、「北九州市立八幡市民会館」に対しては第1回BCS賞が授与されていますとともに、本会が全国のすぐれた建築を抽出してまとめました「総覧日本の建築」(日本建築学会編)にも掲載されております。また「北九州市立八幡図書館」も村野藤吾の作品としてしばしば取り上げられております。

本建築は2つとも村野藤吾が円熟期に手がけた作品であり、別紙見解書に見られますように、彼の建築的な特徴をよく表現したものとして評価されるものであります。また、九州において彼の青少年期の故郷である八幡の地に幸運にもまとまって隣接してその作品が残されております。これら2つの作品は戦争によって荒廃した地の復興を願った都市計画の中心的部分をなすもので、戦後の八幡の街の中心軸となり、街の景観を作ってきました。そして、今ではそれらを近代遺産として活用していく街づくりを担う役割を果たすことが期待されております。

貴下におかれましては、この2つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

北九州市市議会議長 三原征彦殿

一般社団法人 日本建築学会 会 長 吉 野 博

# 「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

# 保存活用に関する要望書

拝啓時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。 さて、今般、北九州市八幡区の「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の2つの建物の取り壊しおよびその活用法が、隣接する病院の建て替え計画も考慮されながら、市議会で検討され進められようとしていると新聞やテレビ等を通じて聞き及んでおります。一方、地元の方々からは保存を望む声が上げられていることも新聞等のマスメディアを通じて広く知られることとなっています。

ご承知のように当該2つの建物は戦後日本の近代建築界を代表する建築家村野藤吾の設計によるものであり、しかも彼が青少年期に過ごした地元八幡に残した作品であります。「北九州市立八幡図書館」は1955(昭和30)年に竣工・開館し、「北九州市立八幡市民会館」はその3年後の1958(昭和33)年に開館に致しました。その建築作品としての価値が評価されて、「北九州市立八幡市民会館」に対しては第1回BCS賞が授与されていますとともに、本会が全国のすぐれた建築を抽出してまとめました「総覧日本の建築」(日本建築学会編)にも掲載されております。また「北九州市立八幡図書館」も村野藤吾の作品としてしばしば取り上げられております。

本建築は2つとも村野藤吾が円熟期に手がけた作品であり、別紙見解書に見られますように、彼の建築的な特徴をよく表現したものとして評価されるものであります。また、九州において彼の青少年期の故郷である八幡の地に幸運にもまとまって隣接してその作品が残されております。これら2つの作品は戦争によって荒廃した地の復興を願った都市計画の中心的部分をなすもので、戦後の八幡の街の中心軸となり、街の景観を作ってきました。そして、今ではそれらを近代遺産として活用していく街づくりを担う役割を果たすことが期待されております。

貴下におかれましては、この2つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

北九州市教育委員会教育長 柏 木 修 殿

一般社団法人 日本建築学会 会 長 吉 野 博

# 「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

# 保存活用に関する要望書

拝啓時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。 さて、今般、北九州市八幡区の「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の2つの建物の取り壊しおよびその活用法が、隣接する病院の建て替え計画も考慮されながら、市議会で検討され進められようとしていると新聞やテレビ等を通じて聞き及んでおります。一方、地元の方々からは保存を望む声が上げられていることも新聞等のマスメディアを通じて広く知られることとなっています。

ご承知のように当該2つの建物は戦後日本の近代建築界を代表する建築家村野藤吾の設計によるものであり、しかも彼が青少年期に過ごした地元八幡に残した作品であります。「北九州市立八幡図書館」は1955 (昭和30)年に竣工・開館し、「北九州市立八幡市民会館」はその3年後の1958 (昭和33)年に開館に致しました。その建築作品としての価値が評価されて、「北九州市立八幡市民会館」に対しては第1回BCS賞が授与されていますとともに、本会が全国のすぐれた建築を抽出してまとめました「総覧日本の建築」(日本建築学会編)にも掲載されております。また「北九州市立八幡図書館」も村野藤吾の作品としてしばしば取り上げられております。

本建築は2つとも村野藤吾が円熟期に手がけた作品であり、別紙見解書に見られますように、彼の建築的な特徴をよく表現したものとして評価されるものであります。また、九州において彼の青少年期の故郷である八幡の地に幸運にもまとまって隣接してその作品が残されております。これら2つの作品は戦争によって荒廃した地の復興を願った都市計画の中心的部分をなすもので、戦後の八幡の街の中心軸となり、街の景観を作ってきました。そして、今ではそれらを近代遺産として活用していく街づくりを担う役割を果たすことが期待されております。

貴下におかれましては、この2つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

### 「北九州市立八幡市民会館」と「北九州市立八幡図書館」

#### についての見解

一般社団法人 日本建築学会 建築歴史・意匠委員会 委員長 杉 本 俊 多

#### 1. 建設の経緯と概要、評価

「北九州市立八幡市民会館」と「北九州市立八幡図書館」は、JR 八幡駅から南に延びる直線道路の南端のロータリーの南東側街区である北九州市八幡東区尾倉2丁目6番地に位置している。駐車場を兼ねる広場を介してL字形をなすように南北にずれて配置されている。旧八幡市(現在は北九州市に合併)の戦後復興を象徴する事業の一環として、八幡市制40周年を記念して「八幡市民会館」は1958(昭和33)年に、それに3年先んじて1955(昭和30)年に「八幡図書館」が建設された。ともに戦後の八幡市の文化活動の拠点としての役割を担っていた。設計は日本のモダニズム建築を代表する建築家村野藤吾である。

「八幡市民会館」は鉄骨鉄筋コンクリート造と鉄筋コンクリート造の混構造で、地上4階建てであり、清水建設によって施工された。その建物は大ホールと細長い平面をなした展示室からなる。大ホールは3階席まであり、約1450席とオルケストラピットを備え、延床面積は約4800㎡に達する。正面に左右に水平に延びる高さを抑えた玄関ホールとその上にのるホール部分とのヴォリューム感は絶妙であり、その外壁意匠と相まって優れた外観を生み出している。この建物は1960年に第1回BCS賞を受賞するとともに、日本建築学会が全国の主要な建築を取り上げて編纂した「総覧日本の建築」の中にも掲載されている。

一方「八幡図書館」は地下1階、地上3階建ての鉄筋コンクリート造で、延床面積約1500㎡、蔵書数は約20万冊、年間18万冊ほどが貸し出されている。1階部分には玄関やブラウジングルームが置かれているものの、その大部分は開放的なピロティとなっている。2~3階には閲覧室、書庫、事務室が機能的に配置されている。1955年に開館したが、3階部分の内装工事や重層式書架の設置などで完全に工事が完了したのは2年後の1957年とであった。この建物の特徴はなんといってもその外観の意匠にある。すなわち、柱と梁によるグリッドの間を煉瓦で埋めた壁面を作り、その壁面に丸や三角形の幾何学模様を並べるとともに、縦長の窓がリズミカルに配置されている。

この2つの建物の持つ建築史的価値、歴史的価値、都市形成や都市環境的価値について は以下の2点にまとめられる。

#### 2,建物の価値

#### (1)戦後日本の近代建築の代表者村野藤吾の建築的特性を示す作品としての価値

八幡の当該2つの建築が戦後日本の近代建築を代表する建築家である村野藤吾の設計によるものであることをまず上げなければならない。村野は1891年に生まれ、大学卒業後から93歳で人生を閉じる直前までのおよそ65年という長期にわたる設計活動の中で住宅から事務所、ホテル、ホールなどさまざまな種類にわたって数多くの作品を手がけている。彼の作品は社会的に高い評価を受け、たとえば日本建築学会作品賞、日本建築学会大賞、日本芸術院賞、文化勲章など数々の賞に輝いている。つまり八幡の2作品は日本の最も代表的な建築家が円熟期に達した60歳代に手がけた作品として位置づけられる。

次に指摘すべき価値はそれぞれの作品の持つ建築的特徴と、その特徴が村野藤吾の作品全体に通底している点にある。「八幡市民会館」は大ホールとその前面いっぱいに低く水平に伸びる開放的なエントランス部分を持ち、さらにその西側にエントランス部分と直交する形で南北に長く伸びる展示室を備えている。その外観の特徴のひとつは構造体が空間を規定していることを表現しているのではなく、輪郭の明快さを強調した単純な形態を見せている点にある。さらに巨大なホールの外壁の上には薄く勾配の緩やかな切妻屋根がのり、ホール外壁の壁面がエントランス上部のバルコニーと接する部分には水平の細長いスリットが切り込まれていることで、正面全体に軽快な印象を与えている。こうした処理の仕方は日本の伝統的建築である数寄屋風の趣味を示すものである。また、ホール外壁に用いられているのは赤褐色のタイルであり、鉄の町としての八幡の地域性を反映している。正面エントランス部分を見ると、角柱の列柱が並ぶ外部も吹き抜けとなった内部も開放感に溢れ、その上にのるバルコニー部分も外部から自由に出入りできるように解放されている。ホール内部は、タイル貼りの外観とは対照的に、天井は横の波型で柔らかさを出し、側壁には堅木ベニア張りによる木質の暖かさを見せている。そうした柔らかさや暖かみは細部には活かされており、階段の手摺や採光窓の意匠にも垣間見える。

「八幡図書館」の特徴はその外観意匠に集約されているといっても過言ではない。その意匠の特徴は次の3点にある。まず、構造体をなす柱と梁の部材に塗装を施した上で外観に明瞭に見せる一方、その柱と梁の間の部分は煉瓦壁となっている。第2に煉瓦壁部分に異なる煉瓦材を用いることで円形と三角形の幾何学模様が作り出されている。さらに、縦長の窓が適度なリズム感を持って配置されている。これらのことから柱と梁が作り出すグリッドの堅苦しさに留まらない独自の印象、すなわち構造体を強調しすぎない外観を作り出している。第3に、外壁には2種類の煉瓦が使われており、そのひとつは八幡製鉄所の製鉄生産の過程で生じる副産物を材料とした煉瓦を用いていることである。そこに村野の地元あるいは地域へのこだわりを見ることができる。

村野は固定したスタイルや型に固執しない建築家であり、作品が多様な用途にわたっていることもあり、一言で表現しにくい建築家と見られがちである。また、その独特の意匠から教理教条的な近代建築の枠に納まり難いともとられている。しかし、彼の作品には常に明快な形態へ追求が見られ、日本の伝統的建築である数寄屋への強い関心があり、さらに地域への強いこだわりが秘められている。そうした特徴は村野の代表作である広島世界平和記念堂、宇部渡辺翁記念会館、松寿荘といった作品に表現されている。すなわち、八

幡の市民会館と図書館はまさしく村野藤吾の持つ建築の特徴を具現したものとして評価されるのである。

#### (2) 過去と未来を結ぶ北九州市の都市形成史・景観上の価値

都市形成史の上から、当該2つの建物は戦災復興後の八幡の街づくりの核となる部分を構成していたことは明白である。戦災から立ち上がる象徴としての都市計画は現在のJR 八幡駅から南に向かって一直線に300mほど延びる国際通りと南終点に位置するロータリーを中心としてなされた。このロータリーの周りに病院、当該の図書館と市民会館といった公共施設を集中して配置したのである。つまり駅と公共施設の集積場所の2つの核を眼前に明瞭な形で作ることで、八幡の新しい都市軸を生み出し、新たな街の景観を作りだしたのである。さらにこの都市軸は遥か南側に位置する皿倉山にも延びるように自然の地形をも考慮したものであった。

次に村野藤吾の作品がこの都市軸の上に集中して残されていることがあげられる。八幡駅と八幡図書館とのほぼ中程の国際通り沿いに村野藤吾が1971年に手がけた「北九州八幡信用金庫本店(現福岡ひびきの信用金庫本店)」が位置している。村野藤吾は佐賀県唐津市に生まれ幼少期まで過ごし、小倉工業高校を卒業するまでの青少年期を旧八幡市で過ごしていた。そうした故郷への思いが八幡の建物にも繋がっていると推測され、北九州市にはその他に2つ、そして北九州市以外に九州には3つの村野による作品があった。しかしながら、現存するのはこの国際通りとロータリー周りに残る3棟のみである。したがって、村野藤吾の九州における建築遺産群としての価値を有している。

最後に近年の我が国における世界遺産登録運動との関連性からの今後の街づくりへの展望を述べる必要がある。我が国は直近において「近代化産業遺産群」として全国の近代の産業遺産の幾つか抽出して世界文化遺産に登録することを目指すことが決定された。その中にはすぐ近くに位置する「八幡製鉄所施設」が含まれている。また、同じ北九州市の門司には近代の建物が保存されている。こうした明治から昭和にかけての文化的遺産の活用は今後の北九州市の街づくりにおいて重要な役割を果たすことは確実である。それぞれの都市の持つ魅力を生み出す要因のひとつとして文化の重層性が上げられることに疑いの余地は無く、その都市それぞれが辿ってきた歴史を体現した優れた建築物がそのことに大きな役割を果たしてくれるはずである。







#### 北九州市立八幡図書館

- 1 北側正面ファサード
- 2 南側ファサードと相対する 0 北九州市立八幡市民会館 3 南側ファサードのディテール



# 北九州市立八幡市民会館

 4 1 階アプローチ

 5 吹き抜けの階段空間

1 ~ 5 臼井敬太郎 撮影(2014年2月)

